博士論文要約データ

# 大学教育における情報リテラシーの多様性とその育成および評価に関する研究
## ――GeSTE Windows にもとづいて――

飯尾　健

情報社会を迎えた現代において、大学でも初年次教育を中心として情報リテラシー教育が積極的に実施されている。本論文の目的は、現在の情報社会を生きるために必要な情報リテラシーの育成と評価のための知見を提示し、今後の大学における情報リテラシー教育の方向性を示すことにある。

まず本論文では、大学における情報リテラシー教育について現状を概観するとともに、1)「情報リテラシー」が示す能力像について、概念の整理や定義ができていないこと、2）現在行われている情報リテラシー教育の評価や効果検証が進んでいないこと、3）初年次教育以降の専門領域における学習の中で情報リテラシー教育ができていないこと、さらに 4）フェイクニュースや炎上といった、オンライン上の情報に関する情報リテラシー教育が十分進められていないこと、の以上 4 つの課題があることを示した。

これらの課題を解決するために、本論文では Lupton（2008）の提唱する GeSTE Windows を理論的枠組みとして用いることとした。GeSTE Windows は多様な情報リテラシーの在り方を、情報リテラシーを汎用的スキルと捉える Generic Window、専門領域や職業等の状況にもとづいた実践を進める能力と捉える Situated Window、情報を用いた社会参画の能力として捉える Transformative Window、情報の表現を通じた自己の確立や理解の能力として捉える Expressive Window の 4 つにまとめた枠組みである。この GeSTE Windows に照らし合わせると、上記の課題のうち、現在初年次教育で育成されている情報リテラシーは Generic Window、専門領域での学習の中で習得される情報リテラシーは Situated Window、最後にオンライン上の情報に関する情報リテラシーは Transformative Window および Expressive Window に相当すると言うことができる。

したがって、この GeSTE Windows にもとづき、上記の課題に対応する、以下の 4 つのリサーチ・クエスチョンを設定した。すなわち、1）GeSTE Windows にもとづくと、情報リテラシーの能力像同士の関係性はどのように整理・構造化できるか、また、情報リテラシーはどのように定義しうるか、2）現在の大学で主に実施されている、Generic Window としての情報リテラシー教育においてはどのような評価方法が有効か、また学生の習得傾向や効果のある学習方法は何か、3）専門領域における学習を通じた、Situated Window としての情報リテラシーの学習と評価のためには、どのような学習活動が有効か、4）オンライン環境における Transformative Window および Expressive Window としての情報リテラシーの育成を行うために、現在の情報リテラシー教育で不足している点は何か、また、その点を情報リテラシー教育に組み込むために考えられる学習方法は何か、の 4 つである。

これらのリサーチ・クエスチョンのそれぞれに答えるため、本論文では理論研究・実証研究・開発研究を通じて検討を行った。その成果は以下の通りである。

まず情報リテラシー像について、「社会参加」としての情報リテラシー像を最も包括的なものと位置づけた包含関係として情報リテラシーを整理し、かつこの関係性を踏まえた上で本論文における情報リテラシーとして「情報を用いる状況に応じて、必要な情報の探索・評価・活用・発信のための知識やス

キルを用いて求められる目的を達成する能力」と定義した。

また、Generic Window としての情報リテラシーの習得傾向について質問紙調査を通じて分析した結果、学生は基礎的な知識・スキルについてはある程度理解していた一方、より複雑な知識やスキルが求められるようになると困難を感じることが示された。加えて、Generic Window における情報リテラシーの習得においては、大学図書館の利用や、レポート・プレゼンテーションの作成を含めたアクティブラーニング型授業の経験といった、実際に情報を用いることや成果物や知識・情報の外化に関する経験、また高校までの情報教育や調べ学習の経験等が効果を及ぼす可能性が示された。

さらに、インフォグラフィックスの作成という課題の開発と実際の授業科目での実践を通じて、Situated Window としての情報リテラシーの習得においては、インフォグラフィックスという、画像や図を中心とした言語以外の表現形式を用いることにより、表現の前にあらかじめ収集された情報を整理・明確化することを促す可能性が示唆された。一方で、学生の既有知識やスキルを十分に検討したうえで、学生が課題を「自分ごと」として捉えられるよう課題や「足場かけ」を開発していくことの重要性が明らかになった。

最後の、オンライン上の情報に関する情報リテラシーの育成については、パフォーマンス評価の結果および各文献における論考を検討した結果、学生自身の信念や価値観、判断基準、人生経験といったアイデンティティが、オンライン情報を扱う際の大きな要因となるため、情報リテラシー教育において考慮すべき点であることを示した。これにもとづき、オンライン上の情報を扱う情報リテラシー教育の方法として、実際の情報を扱う際の経験を振り返らせたり、実際の情報社会に関与させたりするような学習活動を提言した。

以上の結果をもとに、本論文の知見を整理するとともに、今後の大学における情報リテラシー教育に向けた方向性として以下の 3 点を示した。すなわち、1）学士課程全体を通じた情報リテラシー教育のカリキュラムの整備、2）初年次教育での情報リテラシー教育における実際の情報活用経験を通じた基礎的なスキルの習得の重要性、3）専門領域での学習において学生が「自分ごと」として捉えることで積極的に情報に関わることができるような学習活動の設計の必要性である。